

社会学における専門分野は、地域社会学と福祉社会学になりますが、もともと途上国の貧困問題に関心があり、当時は国際関係学部がなかったので地理学に進みました。が、自らの問題関心とは方向が異なっていたため、最終的に社会学にシフトしました。現在の研究内容としては、ポスト福祉国家の官民／公私関係の態様を、非営利・協同組織などの地域的アクターに着目しつつ、地域的公共性（地域社会の公共性）から分析していくことを基軸に据えつつ、英国や日本の地域研究をしています。地域と関連する分野は幅広く、社会経済学や政治学、歴史学にも関心を持っています。

1. 専門演習の目標

地域社会の公共性を考察するにあたっては、様々なアプローチがある。社会科学における市民社会（シティズンシップ）論や、近代史のなかの国民国家と戦争、ポスト被占領期の社会運動、越境する移民たちの物語、ボランティアセクターの台頭など、いずれも、グローバルとローカルの交錯軸のなかで地域社会と公共性という課題が深く関わってくる領域である。本専門演習は、長期的にはこうした問題群を視野に入れていくが、さしあたり、初回（第1期生）ということもあり、地域社会の公共性を考えるにあたって、身近な事例としてある京都の「まち」を多角的に分析していくことから始めていきたい。

2. 専門演習で扱う課題と内容

本専門演習の研究対象となる京都（あるいは京都市）は、古今東西を問わず、また、学術的・非学術的を問わず、これまで様々な分野から関心が注がれ、見聞され、そして議論される対象となってきたところである。東京一極集中のなかで関西の地盤沈下がいわれて久しいが、首都圏にはみられない日本文化の原点としての都市格を持つ京都は、いまなお多くの人々（外国人も含めて）を惹きつける場所であり続けている。こうした京都についてのこれまでの研究は、歴史や文化、宗教、建築、観光など、多岐にわたって行われてきたが、昨今では、「京学」なる学問分野も登場するようになってきた。しかし、社会学の視点から総体としての京都を読み解いていく研究は、これまでに数えるほどしか存在しておらず、それゆえに、本専門演習は、若い受講生たちの知恵と力を結集しながら、京都の社会学的研究を発展させていくための試みとして、新たに位置づけられるものである。したがって、本演習では、各受講生が、時間軸と空間軸を交差させたサブ・テーマ（産業、歴史、祭祀、住民組織、学校、老舗、食、職人、住居、観光、花街、音楽、妖怪、マンガ、などなど）を構成し、織り上げていくという作業を行う。

3. 授業の進め方・内容

3 回生前期：京都に関する文献を多面的に収集し、各自の関心領域に応じて読み進めていく。また、適宜、京都に造詣の深い人や団体との交流

を行う。

- 3 回生後期：関心領域の近い者同士でグループを組み、その領域についての文献・資料の分析とフィールドワークを行う。
- 4 回生前期：卒業論文の作成に向けて、テーマの選定と分析にとりかかる。
- 4 回生後期：卒業論文を作成する。

4. 必要とする知識

国際文化都市・京都の歴史や文化、社会に関心を持っていること。また、語学力（日本語と英語）を身につけていること（少なくとも英語アレルギーでないこと）。

5. 関連する分野・科目・知識

社会学（地域社会学、都市社会学）の知識が基礎となるが、多面的な角度から京都を分析していくため、哲学、歴史学、経済学、政治学の他、文化学、芸術学なども関連する。立命館大学の京都学プログラムも当然関連する。

6. テキスト・参考書・機材（受講生が標準的に持つもの）

鯨坂学・小松秀雄編『京都の「まち」の社会学』世界思想社、2008、藤田弘夫『路上の国柄—ゆらく「官尊民卑」』文藝春秋、2006、鷲田清一『京都の平熱—哲学者の都市案内』講談社、2007、知恵の会（代表：糸井通浩）『京都学を楽しむ 古都をめぐる33の講座』勉誠出版、2010、他。『立命館大学京都文化講座「京都に学ぶ」』（白川書院、2009）のシリーズ本も適宜参照。

7. 独自に付加する選考方法

レポートの内容が論理的かつ意欲的に記述されていることを主な選考材料としますが、選考の過程において必要と判断された場合、面接を実施することがあります。

8. 受講生に望むこと

自らのテーマについて主体的に取り組めるとともに、ゼミや地域社会の活動に積極的に関わっていただけること、文献・資料を通じた地道な研究とフィールドワーク双方を楽しめる人材を求めます。